

・スティグマの始まり

スティグマという言葉を用いたのは、明らかに、視覚の鋭かったギリシア人が最初であった。それは肉体上の徴(しるし)をいい表わす言葉であり、その徴は、つけている者の徳性上の状態にどこか異常なところ、悪いところのあることを人びとに告知するために考案されたものであった——すなわち、**穢れた者、忌むべき者、避けられるべき者（とくに公共の場所では）であることを告知した**のであった。のちに、キリスト教の時代になって、二つの隠喩の層がこの言葉に加えられた。第一の層は、皮膚に口をぱっくり開けた形をとって肉体に現われた聖寵の徴を意味していた。第二の層は、この宗教的隠喩への医学的言及で、身体上の異常の肉体的徴候を意味していた。今日ではこの言葉は、最初のギリシア語の字義上の意味と似た意味で広く用いられているが、不面目を表わす肉体上の徴ではなく、不面目自体をいい表わすのに使われている。

・スティグマの属性

未知の人が、われわれの面前にいる間に、彼に適合的と思われるカテゴリー所属の他の人びとと異なっていることを示す属性、それも望ましくない種類の属性——極端な場合はまったく悪人であるとか、危険人物であるとか、無能であるとかいう——をもっていることが立証されることもあり得る。このような場合彼はわれわれの心の中で健全で正常な人から汚れた卑小な人に貶められる。この種の属性がスティグマなのである。ことに人の信頼／面目を失わせる(*discredit*)働きが非常に広汎にわたるときに、この種の属性はスティグマなのである。この属性はまた欠点／瑕疵、短所、ハンディキャップともよばれる。

・3種類のスティグマ

三つのきわめて異なった種類のスティグマについて述べよう。第一に、肉体のもつさまざまな醜悪さ——つまりもろもろの肉体上の奇形がある。第二に、個人の性格上のさまざまな欠点があり、それらは意志薄弱、過度の、あるいは異常な情欲、頼りにならぬ信念、かたくなすぎる信念、不正直などとして人びとに知覚されており、精神異常、投獄、麻薬常用、アルコール依存症、同性愛、失業、自殺企図、過激な政治運動などの記録から推測されるものである。第三に、人種、民族、宗教などという集団に帰属されるスティグマがある。それらのスティグマは家系を通して伝えられるものであり、家族の全員を一様に汚染するものである。

・the normals

われわれ、ならびに当面の特定の期待から負の方向に逸脱していない者を、今後私は常人 (the normals) とよぶことにする。

・スティグマのある人の状況

スティグマのある人と常人の両者が接触する社会的場面に参加するとき、スティグマのある人がすぐに直面するものがきまっていると、彼は先を見越して防衛的で萎縮した反応をすることがある。大恐慌時代のドイツの失業者についての先駆的研究はこのことを示している。以下の言葉は四十三才の石工のものである。

失業者という名称をもつことがどれほど苛酷で情けないことか。外出すると、私は自分自身がまったく不甲斐なくて地面を見て歩く。路を行くとき、私には自分が普通の市民たちとは比べものにならないように思われ、私は後指をさされているような気がした。私は本能的に人と会うのを避ける。順調だったときの知人や友人ももはやそう丁重ではない。会っても彼らは冷やかな挨拶しかしない。彼らはタバコもすすめず、その目は「君にタバコを喫う資格なんかないよ。働いていないんじゃないか。」と見えているように見えるのである。

ある若い肢体不自由な女性が消息をよく伝える分析を提供している。

私が街をひとり歩きするようになってから……三、四人の子供たちが集まって歩道にいるところをどうしても通り過ぎなくてはならないとき、たまたまあたりに誰もいないと、彼ら

は私に向かって喚声をあげるのであった。よく彼らは私の後を追いかけて来たりすることさえあって、わめいたり、嘲ったりした。私はこれにどう対処していいか分からなかった。それは耐え切れないことのように思えた……

しばらくの間、街で子供たちとこういう出会いを重ねるうちに、どの見知らぬ子供をみても、私は恐怖心で満たされるようになってしまった……

ある日突然、自分が自意識過剰で、未知の子供たちを恐れるようになってしまっているの
で、子供たちは動物のように、**私が彼らを恐れているのを知っているのだ**ということ、だからとてもおとなしい愛くるしい子供でも私自身の萎縮と恐怖に誘われて**自動的に嘲笑的態度をとるようになるのだ**、ということに私は気がついた。

ある脳性麻痺の犠牲者は次のようにいう。

たった一つの非常に苦痛な例外は別として、私が家庭生活とか、大学生活のスケジュールに従っていて、一人前の市民としての権利を行使しない限りでは、社会のさまざまな動きは思いやり深く、穏やかでした。**大学を出、大学院で経営学を専攻**し、地域の事業計画にボランティア・ワーカーとしてさまざまなことをしているうちもよかったが、のちに就職しようとする、その世界にある中世的な偏見とか迷信のためにしばしば壁に突き当たったのです。仕事を探すのは、射撃する一団の兵士の前に立つようなものでした。**雇用主たちは私が求職するなんて厚かましいと驚いていました。**

・個人的アイデンティティの確定方法

法廷が、どうみても自分の素性を隠す事情も動機もある人間を扱う場合、名前以外の決定的な標識を求めるのは理の当然である。英国の例をあげてみよう。

……法廷では、**個人的アイデンティティは、名前によっては確定されない**。もっぱら被告自身の証言に依拠するのでもない。そうではなく個人的特徴の類似点あるいは相違点という証拠を用いて（**推定するという仕方**で）**確定されるのである**。

・〈尿道狭窄〉の少年

他人がいるところでは小便のできない〈尿道狭窄〉の少年が、この障害を秘密にしておきたくて、他の少年たちが単純に男の子として振舞えばすんでいる場合、色々と工夫をし、細工もし、**隙なく構えなくてはならないことを明らかにしている**。

十才になって寄宿制の学校に入ったとき新しい困難が生じ、その困難を処理する新規の手だてを見つけなくてはならないことになった。一般的に言って、〔自分が〕小便をしたいときに〔一人で〕するのはそれほど大したことではなく、尿意はあっても〔他人がいるところで〕するのは一仕事であった。私は他の少年たちには自分の障害を隠しておくことが必要だと感じた。いうまでもないことだが、寄宿制予備校にいる男の子にとって最悪の事態は、どんな点にしろ**〈他人とは違っている〉**ということである。それで友だちが手洗に行くときは、私も一緒に行った。そこでは仲間が自然に振舞い、壁に小便を飛ばしてどこまで高く届くかを互いに競い合うときの活達さに村する羨望がいつそう強くなること以外は、これという出来事は生じなかった。（できれば私もやりたかったのである。しかし誰かが私に挑戦してくると、いつも〈丁度終った〉ところだ〔と答えた〕。）私はいろいろな策を用いた。一つは、手洗に人の少ない授業中に行かせてもらう手であった。他には、夜、目を覚ましていて同室の者が寝静まったとき、あるいは暗くて人に見られる心配のないとき、寝台の下の尿瓶を使うという手もあった。

・スティグマのある人の自己矛盾

上述したところで指摘したことは、スティグマのある者は、自己自身を他の人間とはまったく**違ったところのない人間**と定義するが、ところがまた一方では同時に、自分を彼の周囲のひとと一緒に**別種の間人**と定義している、ということであった。**スティグマのある者に、**

右のような根源的な**自己矛盾**がある以上、結果的には自分自身のおかれている状況に首尾一貫した意味を与える**準拠的言説**を得ることに終わるに過ぎないにしても、何とか努力してこの**ジレンマ**を脱出する**方途**を探し求めようとするのは理解できないことではない。

・スティグマのある人は芝居をせざるを得ない

劇化とはスティグマのある者が自分の同類に負わされている好ましくない特性を、常人たちの前で彼らの**気を惹くような仕方**で演じて見せ、生活状況を道化たものにしてしまうことである。

また私の理解したことは、肢体不自由者は人びとが彼に期待している仕方とは違った仕方で行わないように注意しなくてはならない、ということだった。何といたっても人びとは、**障害者は障害者らしく、無能で弱々しいもの、彼らに劣るものと期待している**。肢体不自由の人がこのような期待に背こうものなら、彼らは怪しみ、不安になるのだ。奇妙なことだが**障害者は障害者の役割を演じなくてはならないのだ**。それはちょうど、女性は、男性が女性はいかかあるべきと期待している通りに、つまりまったく女性らしくしなくてはならず、また黒人たちが、彼らに〈優る〉白人たちを前にして白人が色の黒い同胞に脅威を感じたりしないように、しばしば道化役を演じなくてはならないことに類似している。

昔私はひとりの矮(わい)人症の人を知っていた。彼女は、本当に、この事態の非常に哀切な一例だった。彼女はとても小さくて、約一メートル二〇センチぐらいだった。彼女は非常に豊かな教養の持主であった。ところが人前では、彼女は細々と気を配り、〈矮人〉に徹し切るのであった。中世の宮廷以来ずっと道化の特徴とされてきたのと同じ作り笑いをし、素早い可笑しい動きをする道化の役を演じたのである。友人と一緒にいるときだけ、〔宮廷における矮人の仕着せだった〕道化の帽子とそれについて鈴をかなぐりすて、彼女の真の姿、知的で悲しみに満ち、非常に孤独な女性にやっとなることができたのである。

以上とは反対に、障害者は〈正常を装う〉(normification) たり、〈何気ない風を装う〉(deminstrelization) と、咎められるのが普通である。

・ある身体障害者の事例

ある身体障害者が別の例を加える。

しかし人びとはあなたが自分の役割を果たすように期待しているに留まらない。彼らはまた、あなたが自分の場所をわかまえていることをも期待しているのである。たとえば、私はオスロの屋外レストランで見かけた男のことを思い出す。彼はひどく不自由であった。車椅子を降りて、テーブルの並んでいるテラスに通ずるかなり急な階段を昇るところだった。足が使えないので、**膝で這い上がらなくてはならなかった**。この見慣れない遣り方で彼が階段を昇り始めたとき、数人のウェイターが彼のところに走り寄った。それは彼に手を貸すためではなく、人びとが店に来るのは、**楽しみ愉快な一時を過ごすため**であって、**障害者を見て暗い気分になるためではない**から彼のような人間は客として扱うわけにはいかない、と伝えるためであった。

スティグマのある人が、自分自身が〔常人に〕如才なく受け容れられていることをあまり真面目にとり過ぎてしていると指摘されるのは、この受け容れが条件付きなことを示唆している。〔スティグマのある者を〕**気兼ねなく受け容れることができる限度**——あるいは最悪の場合でも**不承不承受け容れることができる限度**——が越えられるか否かは**常人次第**である。

・スティグマのある人の方が奥を見ている

スティグマのある人がこのような意味でのよい**適応**をしている場合に、彼はしばしば強い性格、あるいは**深遠な人生観**をもっている、といわれる。恐らくそれは心の底でわれわれ常人が、彼が積極的にそのように行為する能力の説明を、探し求めているからであろう。

・スティグマのある人に求められていること

一般的な定式は明らかである。すなわちスティグマのある者に要求されているのは、自分の

荷が重いとかあるいは彼がその荷を担っているのが常人とは違った種類の人間になってしまったといったようなところを、**些かも見せずに行動する**ということであり、同時に彼についての〔スティグマという荷はさほど重くなく彼と常人とはさほど違ってはいないという〕信憑を常人が痛み感ぜずに信じられるほどに常人から距離を保って身を博さなくてはならない、ということである。別の言い方をすると、スティグマのある人は〔自分の立場での〕自己自身ならびに常人の受け容れ方を、**そもそもまだ常人が彼に示したこともない〔常人の立場での〕彼の受け容れ方と、交換するように忠告されている**のである。

・この本のテーマ

この試論は、スティグマのある人間の状況と、おかれている状況への彼の応答を取り扱っている。

・アメリカの the normals

たとえばアメリカにはある意味でたっ

た一つの〔型の〕完全に無疵の男性しかいない。すなわち若くて、既婚の、白人で、都会に住み、北部出身で、大学教育を受けた、性的に正常で、プロテスタントの、子供がいて、ちゃんとした職につき、きれいな肌をし、中肉中背、何かスポーツで最近に一ついい記録を出している男がそれである。あらゆるアメリカの男性は誰も彼もこの世をこの視角から眺める傾向がある。

・他人の好奇心を断ち切る術

たとえば身体的にハンディキャップのある人が、見ず知らずの人び

とから交渉開始を告げる同情的で穿鑿的な態度を示され、これを受け容れなければならない場合、ときとして気転とは言えないような仕方で自己のプライバシーを守ることがある。たとえばある片足を切断した少女は未知の人びとに**足をなくした理由をいろいろ尋ねられる**ことが多いので、彼女が〈ハムと足〉と称するゲームを考案した。このいたずらの狙いは劇的に演じられた**途方もない説明で相手の好奇心を封ずる**ところにあった。同様の境遇にある別の少女は類似の戦略を伝えている。

どうして片足を失ったのかというたびたびの質問は私をうんざりさせました。それで私は人びとが**根掘り葉掘り聞くのを封ずる**ようなきまりの答を考案しました。「金融会社からお金を借りたんです。そして担保に足をとられたんです！」

・集団的逸脱者は社会の動機づけの枠組に収まらなかった人びと

もし（逸脱）という一つの研究分野があるとすれば、おそらくその核を構成すると思われるものは、ここに定義されたような意味での**集団的逸脱者**であろう。それには、売春婦、麻薬中毒者、非行者、犯罪者、ジャズ演奏家、ボヘミアン、**ロマニ**、カーニバルの香具師、放浪者（ホーボー）、安葡萄酒中毒者、旅芸人、賭博常習者、波止場ルンペン、同性愛者、再起しようとしないう都会の貧困層などが――含まれる。これらは社会秩序を何らかの仕方で集団的に否定する行為を行っていると考えられる人びとである。この種の人びとは社会の多様な公認の通路にある向上のために利用し得る機会を用いようとしないう者と見なされている。**彼らは自分たちよりよい生活をしているものにあからさまな敵意を示し、謙虚さに欠ける**。集団的逸脱者は社会の動機づけの枠組に収まらなかった人びとの代表である。

この本は、下記の全訳。

Erving Goffman, *STIGMA: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc., 1963

・ **stigma**

【名】

1. 汚名、汚点、汚れ、染みとなるもの、不名誉(の印)、恥辱(の印)
2. [罪人などの体に押された]焼き印、烙印